

## 史料紹介と研究

「琉球首里ノ圖」・「琉球那覇圖」  
―古河歴史博物館蔵「鷹見泉石関係資料」より―

渡辺 美季

「鷹見泉石関係資料」(古河歴史博物館蔵、重要文化財)は、下総国古河藩にて家老などを務めた鷹見泉石(一七八五―一八五八年)に関わる約三千点の資料群である。泉石(名は忠常、通称は十郎左衛門)は、藩主土井利厚・利位に仕える一方、蘭学を学び、多くの学者・文人と交際するなかで、千点近い内外の地図を含む研究資料の収集にあたった「永用一九九七、片桐二〇一九」。その収集資料のなかに、「琉球國図共四／外首里那覇圖二」と墨書された封筒があり、「琉球國全図」と題された四舗一組の図とともに「琉球首里ノ圖」・「琉球那覇圖」との主題を持つ二葉一組の鳥瞰図の鷹見泉石による写本が同封されている【図1・2】。本稿では従来知られてこなかった、この二葉の地図を紹介したい。

「琉球首里ノ圖」(紙本墨画、縦四〇×横六七センチ)は、内題に「中山王府京都」との注記があり、右に首里城、左上に円覚寺・円鑑池・龍潭・弁財天堂などの周辺施設、左下に中山門と守札門を結ぶ綾門大道と、その沿道にある王世子(中城王子)の住む中城御殿などが描かれている【図3】(参照)。ただしこれらの施設名は図中には記されず、中城御殿に「琉久世子(琉球世子)」、首里城正門である歓会門に「那覇奉行、交代之時、此門へ入」、右掖門に「奉行、此門へ入」と注記が付されるのみである。

那覇奉行とは、薩摩藩の在番奉行であると考えられる。在番奉行は、琉球監督のために派遣される二〇名弱の藩士衆の長として、那覇西村に置かれた薩摩藩の出先機関である御飯屋(在番奉行所)に詰めていた「徳永二〇〇

五」。その在任期間は原則として二八ヶ月で、着任時と退任時のほか、年頭挨拶・暑中見舞・寒中見舞として年三回、首里城に招請され、城内の南殿や書院で接待された「渡名喜一九八二」。「琉球首里ノ圖」の左下には守札門に向かう一団が見えるが、他図との共通性から在番奉行の一行が描かれているものと推測できる【図4】(参照)。「那覇奉行、交代之時、此門へ入」との注記から、着任または退任時の登城が描かれている可能性がある。なお右掖門に「奉行、此門へ入」とあるが、動線としては不自然であり、他にこれを裏づけるような記録も見出せないことから、注記の位置を誤った可能性が考えられる。

一方、図右上の首里城正殿の正面には、唐破風の柱間(柱と柱の間隔)と同じ幅の直線的な石段が描かれており、中庭を挟んで対面にある奉神門は長屋門の形式となっている【図5】(参照)。「伊從二〇〇五・安里二〇一九a・b」。七〇九年の首里城全焼と一七二一―一七二五年の再建を経て、正殿石段は末広階段に、奉神門は三棟三門となり、さらに一七六八年の正殿改修により唐破風は柱間三間となった【図5】(参照)。「伊從二〇〇五・安里二〇一九a・b」。以上から「琉球首里ノ圖」には、一八世紀初頭、あるいはそれをやや遡った時期の城内景観が描かれている可能性が指摘できる。

「琉球那覇圖」(紙本墨画、縦四〇×横六七センチ)は、内題に「薩摩御奉行住居也」との注記があり、南北の突堤(屋良座森城・三重城)に守られた那覇港を右下に、その左側に広がる那覇―浮島と呼ばれた離れ島であった――から、長虹堤を経て本島に接続し、国廟である崇元寺(左上)へと至るまでが描かれている【図6】(参照)。また人物は描かれていない。なお薩摩御奉行とは、在番奉行のことである。

図中の注記は「琉球首里ノ圖」より豊富で、在番奉行に関わる機関名と遊廓に関する記載が目立つ。機関名の内、「奉行假屋」は西村の在番奉行所であり、「横目假屋」は、在番奉行所の監視的な役割を帯びて薩摩藩から派遣された横目一名の宿所(横目宿)とみられる。横目宿は東村に二箇所あった

〔琉球国由来記〕巻八)。「里之子假屋」は、久米村に置かれた那覇里主所<sup>なはしりしよ</sup>であろう。これは琉球(首里王府)の行政機関で、那覇の行政や在番奉行の接待を担った。「奉行假屋」付近に見える「大和町／ヤマト丁」の記載は、位置からすると西村を指すと考えられるが、この呼称を裏づけるような他の記録は見当たらない。ただし西村には在番奉行所があったほか、西村を含む那覇港周辺には琉球に出入りする薩摩の船頭・水主が数多く滞在していたため〔渡辺二〇一一〕、西村ないしは那覇のいずれかの地区に対して「大和町」という通称が用いられていた可能性は否定できない。

遊廊を示す注記は「ツジ(辻)・「ケイセイ(傾城)町」・「ゾウリ(尾類)」「ワタンジ(渡地)・「中シマ(仲島)」の計五箇所である。首里王府は一六七二年に辻と仲島に私娼を集めて遊里とし、その後、渡地にも遊廊が造られ、この三地点が琉球の遊廊となった。ジュリとは遊女のこと、単身で琉球に渡航する薩摩の在番奉行衆や船頭・水主たちは、その重要な客であった〔伊波一九一九、真栄平二〇一九、渡辺二〇一一〕。

「琉球那覇圖」の注記は、内容としては当時の状況に概ね適合するものの、位置としては不正確なものが多い。例えば「奉行假屋」(在番奉行所)は実際には「里之子假屋」のやや左に、「里之子假屋」(那覇里主所)は天使館のやや左上あたりに位置し、西町に描かれた「横目假屋」は東町にあった。辻・渡地の位置も不正確である。しかし図自体は、那覇全体の構造から石碑・鳥居などの細部に至るまで、比較的正確に描かれている。この「不正確な注記の多い、比較的正確な図」という特徴の一端は、「琉球首里ノ圖」における右掖門の注記にも見出せる。このことから両図ともに、図と注記の成立過程が異なっている可能性が指摘できる。琉球で作成された図に、琉球に不案内な第三者が何らかの文字情報に依拠して注記を書き加えたのであるうか。

図中左上に目を転ずると、十貫瀬<sup>じっかんじ</sup>が久茂地川の干潟に突き出た形で描かれている〔図7〕。この部分は一七三三年の首里王府の干拓事業によって陸地化するため「安里二〇一九a・b」、それ以前の状況が描かれているものと

見られる。「琉球首里ノ圖」の景観年代を加味すると、両図は一七世紀末から一八世紀初頭の首里・那覇の景観を描いた鳥瞰図と見なし得るように思われる。

また両図の主なモチーフは薩摩の在番奉行であり、絵図の受容・消費者として日本人が想定されていることがうかがえる。琉球の絵師による首里・那覇の鳥瞰図は複数現存しているが、とりわけ次の六つの屏風は、日本向け——より具体的には薩摩向け——の名所図／土産物として、一九世紀の琉球・沖縄の民間工房において作成された可能性が高く〔渡辺二〇一四〕、在番奉行の行列や薩摩人男性と遊女との関わりを描くなど、「琉球首里ノ圖」・「琉球那覇圖」とモチーフ的な親和性が認められる。

- ① 「琉球交易港図屏風」(浦添市美術館蔵)
- ② 「琉球貿易図屏風」(滋賀大学経済学部附属史料館蔵)
- ③ 「琉球進貢船図屏風」(京都大学総合博物館蔵)
- ④ 「首里那覇港図屏風」(沖縄県立博物館・美術館蔵)〔図8〕
- ⑤ 「首里那覇鳥瞰図屏風」(那覇市歴史博物館寄託伊江御殿家資料)
- ⑥ 「那覇港図」(首里城公園蔵)

(※①③④⑤は構図が著しく似通っている。)

この六点の内、②は二〇〇〇年に行われた修復作業の際に、その下貼文書から文政末年(一八三〇年頃)に作成された薩摩藩江戸藩邸の帳面が発見されている〔岩崎二〇〇一〕。これとよく似た①は、一八八六(明治一九)年に沖縄に赴任した鹿児島警察官が、沖縄で入手した絵を持ち帰ったもので、登城する在番奉行を描く④は、一八八九(明治二二)年に新潟の山口なる人物が鹿児島にて買い求めたものである〔渡辺二〇一四〕。

ところで鷹見泉石は「琉球首里ノ圖」・「琉球那覇圖」をどのように写し得たのであろうか。その日記によれば、泉石が大坂に赴任中の一八三六(天保七)年正月一〇日条に「琉球四枚、郡助、春三郎、目六三、平次、川崎、上施、貞五郎、陸奥二、伊賀、其次」とある。さらに同年一月一九日条に「七半過より兼て約束二付兼葭堂へ参。銅板百〇図、琉球、伊賀、奥州、図



図1 琉球首里ノ圖 (古河歴史博物館蔵)





図2 琉球那覇圖（古河歴史博物館蔵）

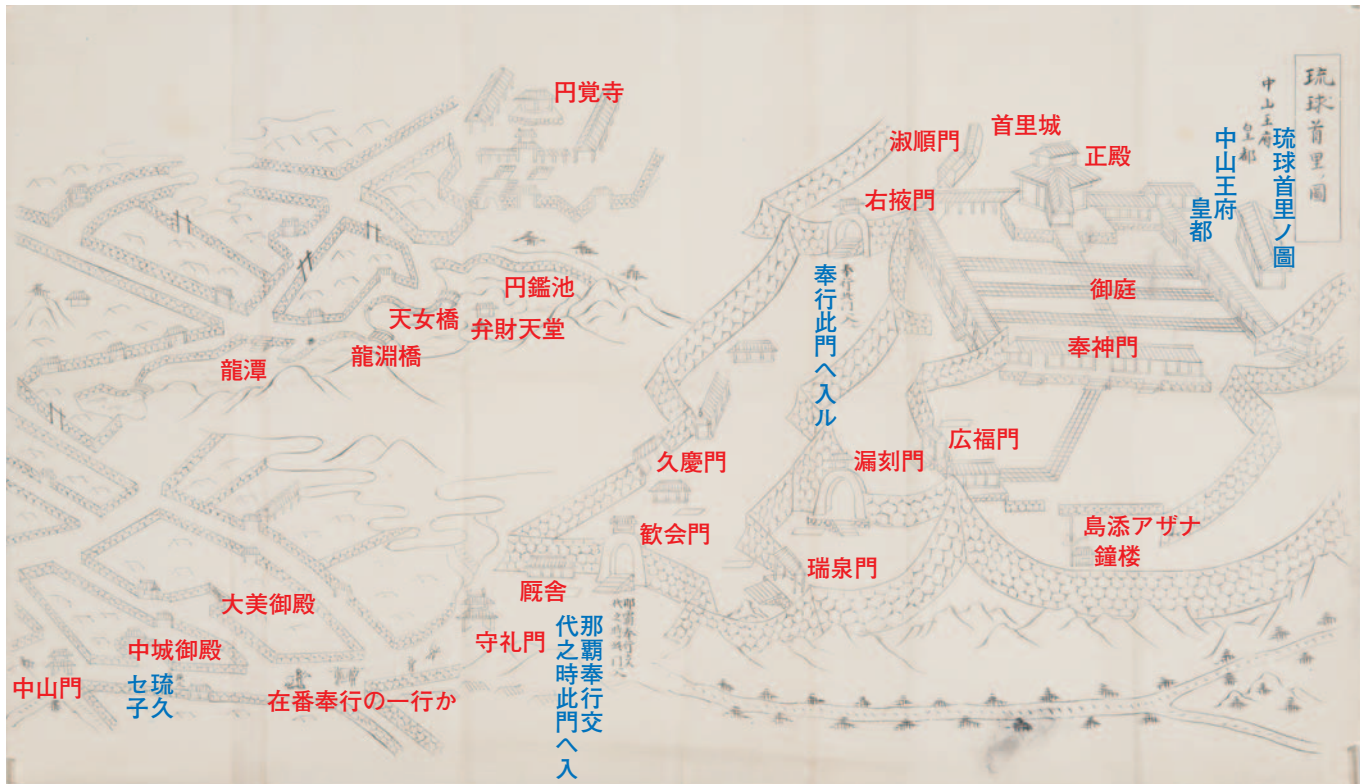
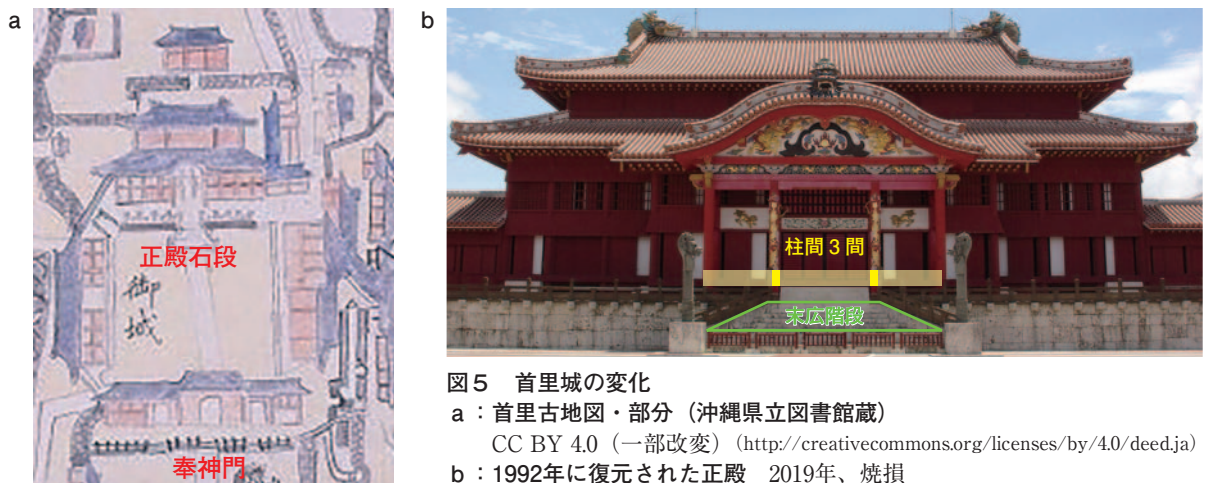


図3 琉球首里ノ圖（注記および描かれた事物の比定） 青字：注記、赤字：事物の比定





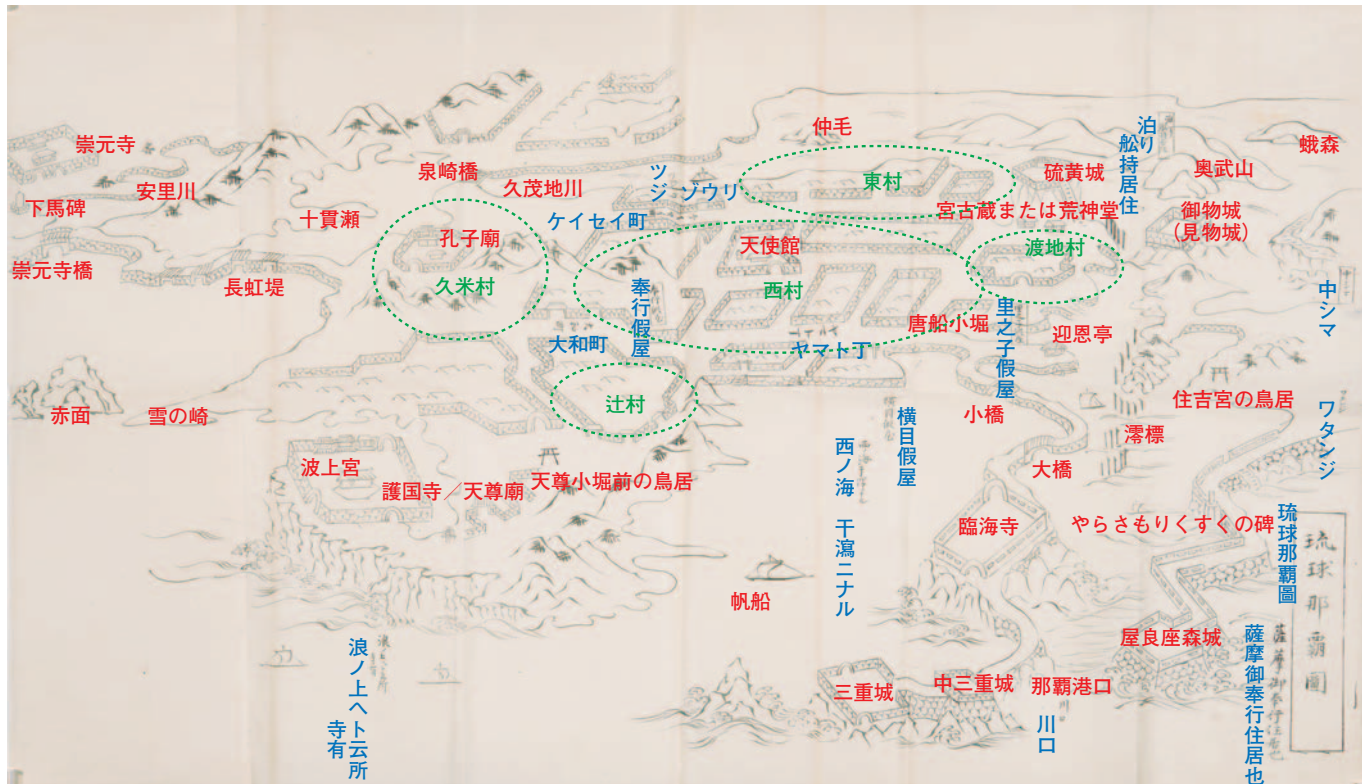


図6 琉球那覇圖（注記および描かれた事物の比定） 青字：注記、赤字：事物の比定（各村の実際の位置を緑色で示した）



図7 十貫瀬の変化

b：友寄喜恒「那覇絵図」（1881年頃）・部分（沖縄県立図書館蔵）  
CC BY 4.0（一部改変）  
(<http://creativecommons.org/licenses/by/4.0/deed.ja>)

借、五前帰」とあり、翌年二月一六日条には「郡助より琉球国図四枚出来」と見える。兼葭堂とは、稀代の蔵書家・考証家として名を馳せた大坂町人木村兼葭堂孔恭（一七三六―一八〇二年）の養子二代目木村兼葭堂石居のことであり、郡助とは泉石が他所から借りてきた絵図の模写を請け負っていた人物とみられる。従って日記からは、一八三六年一月に郡助に「琉球国図」四枚の模写を依頼し、翌年二月に受け取ったこと、一八三六年一月に兼葭堂二世より「琉球国図」を借りたことの二点が読み取れる。日記を通覧したところ他に琉球の絵図に関する記載は見当たらず、枚数の一致から「琉球国図」四枚は「鷹見泉石関係資料」の「琉球国全図」であり、またこれと同封されていることから「琉球首里ノ圖」・「琉球那覇圖」が「琉球国図」である可能性が指摘できる。日記には「琉球国図」の出所は明記されていないが、この時期、泉石は兼葭堂二世と頻繁に交流して多くの絵図を借覧しており、また兼葭堂（一・二世）は他にも琉球の図を所蔵していたとみられることから、「琉球国図」も兼葭堂から借りた可能性が考えられる。兼葭堂一世は、蘭癖大名として有名な島津重豪と親交があり、薩摩藩邸にも頻繁に出入りしていた「瀧川一九七七」。「琉球貿易図屏風」が江戸の薩摩藩邸にあったように、京都や大坂の薩摩藩邸にも何らかの首里・那覇の鳥瞰図が存在していたとすれば、少なくとも初代兼葭堂にとって、その写本を入手することはそう難しいことではなかっただろう。

一六〇九年の軍事侵攻を契機に琉球を支配下に置いた薩摩藩は、琉球と日本の間のヒト・モノの移動を独占的に統制した。これにより同藩の「外」で得られる琉球情報は極



めて限定的なものとなった。しかし日本の一部の知識人は、あくなき知的好奇心を背景に、自らの人的ネットワークを駆使して、この細い琉球情報のパイプを開拓・活用していた。鷹見泉石はまさしくその一人であり、「琉球首里ノ圖」・「琉球那覇圖」は近世日本の琉球情報の有り様を通じて琉日関係の一実態に迫り得る好素材であると言える。

### 【参考・引用文献】

- 安里 進 二〇一九a 「首里那覇鳥瞰図の年代設定と描かれた景観の虚実」平井松午編『近世城下絵図の景観分析・GIS分析』古今書院
- 安里 進 二〇一九b 「Ⅱ―(一) 描かれた首里城正殿の虚実」沖縄県教育庁文化財課史料編集班編『沖縄県史 図録編』前近代、沖縄県教育委員会
- 有坂道子 二〇〇七 「木村兼葭堂と地図」藤井譲治・杉山正明・金田章裕編『大地の肖像 絵図・地図が語る世界』京都大学学術出版会
- 伊波普猷 一九一九 「尾類の歴史」『沖縄女性史』小澤書店
- 伊従 勉 二〇〇五 『琉球祭祀空間の研究―カミとヒトの環境学』中央公論美術出版
- 岩崎奈緒子 二〇〇一 「琉球貿易図屏風」の成立について―下貼文書の検討から―『滋賀大学経済学部附属史料館研究紀要』三四
- 大阪歴史博物館編 二〇〇三 『木村兼葭堂―なにわの巨人―』思文閣出版
- 片桐一男 二〇一九 『鷹見泉石 開国を見通した蘭学家老』中央公論新社
- 古河歴史博物館編 一九九三 『鷹見家歴史資料目録』古河市教育委員会
- 古河歴史博物館編 二〇一八 『没後一六〇年記念 鷹見泉石展―帝室博物館を彩った至宝群―』同博物館
- 瀧川義一 一九七七 「木村兼葭堂の琉球に対する関心」『国学院雑誌』七八―六
- 徳永和喜 二〇〇五 「琉球在番奉行の設置と展開」同『薩摩藩対外交渉史の研究』九州大学出版会
- 渡名喜明 一九八二 「御書院御物帳」(沖縄県立博物館蔵)「御座飾帳」(同)「御書院並南風御殿御床飾」(同)「沖縄県立博物館紀要」八
- 永用俊彦 一九九七 「近世後期の海外情報とその収集―鷹見泉石の場合―」岩下哲典・真栄平房昭編『近世日本の海外情報』岩田書院
- 真栄平房昭 二〇一九 「琉球在番奉行・附役論―その死と墓をめぐる記憶―」『首里城研究』二二
- 琉球船と首里・那覇を描いた絵画史料研究会編 二〇一九 『琉球船と首里・那覇を描いた絵画史料研究』思文閣出版
- 渡辺美季 二〇一一 「境界を越える人々―近世琉薩交流の一側面―」井上徹編『海域交流と政治権力の対応』汲古書院
- 渡辺美季 二〇一四 「琉球交易港図屏風」考』『日本近世生活絵引』奄美・沖縄編纂共同研究班編『近世日本生活絵引』奄美・沖縄編、神奈川大学日本常民文化研究所非文字資料研究センター





【謝辞】

本稿作成にあたっては、安里進・麻生伸一・上原兼善・黒嶋敏・高良倉吉・豊見山和行・松尾晋一の各氏のご教示・ご協力をいただいた。特に安里進氏には、図の記載内容について懇切なご教示を数多くいただいた。また古河歴史博物館には史料の熟覧や画像の提供において、沖縄県立博物館・美術館には画像の提供において、甚大なご高配を賜った。記して深謝申し上げたい。

注

- (1) 薩摩藩領から琉球の与那国島までが彩色で描かれている。その内容・構図等からは「琉球首里ノ圖」・「琉球那覇圖」との直接的な関連性は見出せない。
- (2) 沖縄県立博物館・美術館蔵「首里那覇港図屏風」(後述)のほか、これとよく似た那覇市歴史博物館寄託伊江御殿家資料「首里那覇島瞰図」にも同様の一行が描かれている。なお後者は博物館のサイトより画像が閲覧できる。
- (3) 琉球の役人や中国皇帝の使者(冊封使)は、奉神門を通じて正殿前の中庭(御庭)に入った。
- (4) 本段落の記述は、安里進氏のご教示に依拠している。
- (5) 沖縄県立芸術大学蔵鎌倉芳太郎資料「百浦添御殿普請付御材木寸法記」による。一九九二年の首里城正殿の復元は、この記録に基づいてなされた。
- (6) 薩摩藩は女性の琉球渡海を禁じ、また同藩男性が琉球において家を構え妻を娶ることも禁じていた。
- (7) 本段落の記述は、安里進氏のご教示に依拠している。
- (8) それらを網羅的に収録した書籍として『琉球船と首里・那覇を描いた絵画史料研究』(琉球船二〇一九)がある。
- (9) 古河歴史博物館編『鷹見泉石日記』三、吉川弘文館、二〇〇二年。
- (10) 例えば天保八年正月一〇日条には「今日帰懸之由、郡助、春三郎、平次右、川崎遊、助四郎、貞五郎、其二写物頼」とある。
- (11) なお「鷹見泉石関係資料」には他に琉球の図は含まれていない(「古河歴史博物館一九九三、永用一九九七」)。
- (12) 琉球の画家殷元良(一七一八〜六七七年)による「琉球図」(西尾市岩瀬文庫蔵)は、欄外付箋より兼葭堂(恐らくは二世)所蔵の原図を一八三三(天保四)年に中島憲秀が模写したもので、地名注記に琉球の画家ではあり得ない誤記や当て字が散見される(安里進氏のご教示による)。また「琉球国図」二鋪(国立公文書館内閣文庫蔵、請求記号一七八―〇三一七)は、表紙に「兼葭堂蔵贋寫」とある(本図に関する情報は黒嶋敏氏のご教示による)。兼葭堂一世の蔵書の多くは、その死後一八〇三年に幕府に献上され昌平坂学問所に所蔵されたが「大阪歴史博物館二〇〇三」、その内の一点の贋写とみられる「有坂二〇〇七」。現存は二鋪のみだが、表紙に「共四鋪」とあり、本来は四鋪であったことが分かる。鷹見泉石の「琉球国図」と同系統の図であるが異なる点も多い。(東京大学大学院総合文化研究科／画像史料解析センター共同研究員)



図8-a  
(第六扇中央下)：  
薩摩船に乗る遊女  
(紅衣の女性)



図8-b (第七扇右下)：遊女とともに  
競艇を見物する在番奉行衆

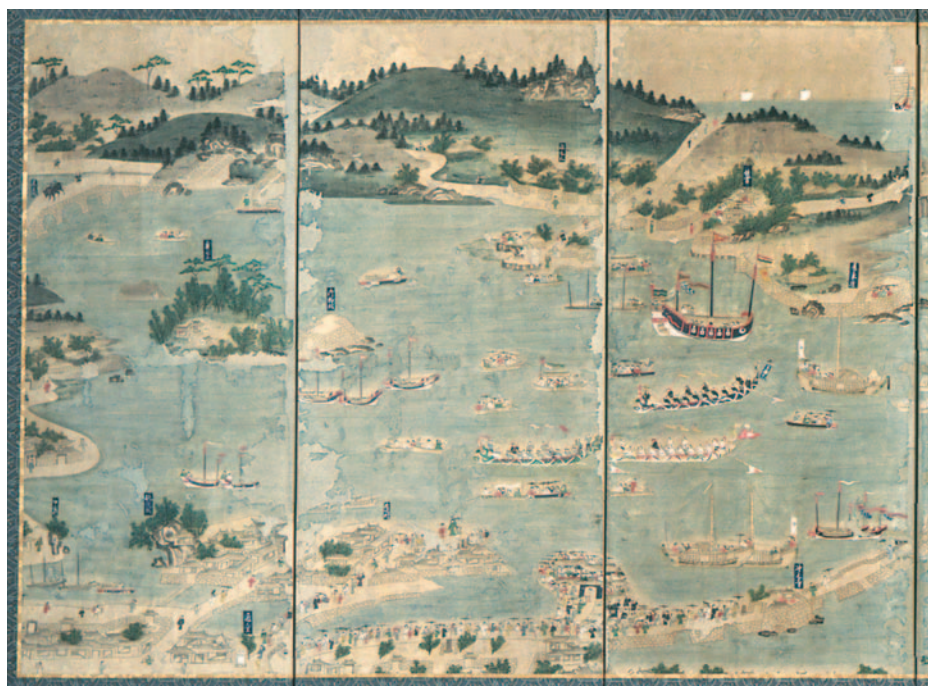


図8 首里那覇港図屏風(沖縄県立博物館・美術館蔵)